ミシガン大学人口研究センターへの出張

社会福祉法人恩賜財団母子愛育会の平成7年度家庭・出生問題総合調査研究推進事業にかかわる「外国への日本人研究者派遣事業」により，1996年1月28日から3月1日までの34日間，米国ミシガン州のミシガン大学人口研究センター（Population Studies Center, The University of Michigan）に訪問研究者（Visiting Research Scholar）として滞在した．本出張の目的は，出生力の経済理論の現状を調査することにあったが，わが国の近年の出生力低下が社会的関心を集めていることに鑑み，バッツ＝ウォード・モデルに代表される新家政学的なマクロデータの時系列分析に焦点を絞った情報収集を行った．同センター図書室の協力により関連文献の収集を行った他，センター長の David Lam 教授，Albert I. Hermalin 教授，Robert J. Willis 教授から有益な助言を得た．また，2月15日にはコネチカット州のエール大学（Yale University）を訪問し，経済学的出生力研究の第一人者のひとりである T. Paul Schultz 教授から，わが国の既存の出生力分析の問題点について貴重な示唆を得た．なお，本出張の成果を反映した研究ノート「バッツ＝ウォード型モデルによる日本の出生力分析」が次号に掲載される予定である．（今井博之記）

ロックフェラー大学ならびに国連人口部等への出張報告

平成8年3月12日より同21日の期間，人口推計ならびに死亡率の人口学的研究に関するワークショップ（コロンビア大学）への参加，ならびに先端研究情報収集のために米国東海岸地域の研究機関ならびに大学を訪問した．

コロンビア大学で開催されたワークショップでは，ロックフェラー大学のホリウチ教授による高齢者死亡に関する研究をもとに討論が行われ，生物医学ならびに人口学の分野から活発な議論が行われた．

情報収集に関しては，国連人口部で，現在改訂中の新世界人口推計（本年度内に公表予定）の概要について説明を受けるとともに，死亡研究の専門家であるラリー・ヘリグマン博士らと意見交換を行い，日本の死亡研究にとって多くの示唆を得た．また，ロックフェラー大学では，ホリウチ博士とワークショップで報告された研究を含め，米国の死亡研究について懇談し，資料提供を受けた．また，ペンシルバニア大学では，人口研究センターのサミュエル・プレストン教授ならびに経済学部のアルバート・アンドー教授と「人口高齢化」ならびに「高齢者死亡率」研究に関して懇談し，日本の研究に関して助言と貴重な示唆を受けた．（高橋重郷記）

外国関係機関からの来訪者

（1996年1月2日～1996年4月1日）

1月22日～2月24日	Gianpiero Dalla Zuanna (University of Rome, Italy)
2月9日	Richard A. Schieber (Center for Disease Control, USA)
2月23～26日	金益基（Dongguk University, Republic of Korea）
2月26日	Basem Abu Ra'ad (The Jordanian Association for Family Planning and Protection, Jordan)
3月8日	Alejandro Giusti (INDEC, Argentina)